

起・嗚呼、日常

「自由過ぎて若しかしたら最初は戸惑うかも知れないが、段々慣れてくるだろう」

「はい、頑張ります」

「君の学力ならば問題ないと思う。あとこの学校は部活に必ず入らないといけない。毎週金曜日の五時間目が部活動の時間に充てられているから、それまでに決めておいてくれ」

「はい。解りました」

「じゃあ、有城^{ゆうき}くん、君は一年十三組だから。第一校舎の三階ね」

「はい。……第一校舎の、三階……」

「ん？ どうした？」

「いえ、大きいなあ、と思ひまして」

「そうだね。最初は迷うと思う。一人で出歩かない方がいいかもね」

「そうですね。頑張ります」

「じゃあ、今度は教室で」

「はい」

ぼくは一度先生にお辞儀をして職員室を出る。

「失礼しました」

都内で有名な進学校。星神高校。

自由な校風で有名で、制服は一応あるが、私服でもよし。だけれども、多くの生徒は制服を自由気ままに着崩していることが多い。やはり制服は、学生の醍醐味だ。ちなみに、女子生徒はセーラ服とブレザー、男子生徒は学ランとブレザーと選択肢は広い。

そして、転入初日のぼくは普通にしっかりと制服を着てる。

その自由な校風故か、倍率も高く、自然と偏差値もトップクラスになったと云う。

第一校舎、第二校舎あわせて一体どれ位の敷地なんだろうか。ぼくにはとても解らない。兎に角、一学年に大体二十クラスあるこの学校の大きさはとんでもない。

「右？」

転校初日、メインの第一校舎でぼくはすでに迷っている。

八月の夏休みが終わって、新学期になる九月。タイミングとしては良いのかもしれない。地方から親の都合で転校してきたぼくには私立高校と云う選択肢しかなかった。そこ成績の良かったぼくはこんな立派な高校に転校することが出来たのだ。

不満な点と云うか、納得いかない点があるとしたら一つ。

ぼくは親の都合で東京まで引越してきたと云うのに——一人暮らしであると云う事だ。何故かと云えば、ぼくの転校の手続きが全て終わった頃、丁度そのころ……何でだろう……親の転勤先が変わったのだ。多分会社の手違い……ではなく父親の勘違い。本当莫迦だと思う。それなのに凄く優秀で会社からは重宝されている技術士だつて云うんだから不思議すぎる。

だったらぼくの方に母親が付いて来いよ——と普通は思うだろう。でも母親は父親一筋。何年経つてもラブラブしている。

だからぼくではなく父親について行くのはまあ、最初から解つて居た。仕方がないか、とぼくは諦めている。

一人は面倒で大変ではあるけど、まあ気楽で良いか。両親の邪魔もしないであげられるし。

……それよりも当面の問題はこの高校に慣れることだな。

——冒険出来そう。

そう思つてとりあえず第一校舎をうろうろとする。

自由だから制服を着崩している生徒が大半。つまり生徒を見てもどの生徒が何年生なのか解らない。だからぼくと同じ一年生について行けばいい、と云うように判断することが出来ないのだ。

さて——どうするか。

と、うろうろとしてしていると向こうの方から——どうやら三年生の下駄箱の方から——歓声が届いてきた。

黄色い悲鳴と云うのだろう。

何だ？ この学校、アイドルとか居たっけ？

居てもおかしくないだろうけど。

興味本位でその歓声の方へと向かう。

「はぁーい。ごきげんよう、皆さま」

「……………おはよ……」

「ツキとルイのお通り。遅刻しちゃうからちよつとどいて〜」

な……んだらう。

存在感は凄くある。

元氣澆漑とした背の高いポニーテールの人。……多分この下駄箱が三年生だからこの人も三年生。と云う事は先輩。

その人の後ろを、吃驚するほど綺麗で整った顔と体型をしている人——やっぱり多分三年生……が歩いてゆく。

「遅刻……」

黒髪先輩が呟くも、歓声にかき消される。

「どーくー！ はい、またねえ。今日は体育があるから見たい人は今日の三時間目からねっ。授業サボって見においで〜」

なんだ？ そんなに人気があるのか？

確かに容姿が整っていて可愛い。でも……芸能人じゃないんだらう？ たぶん。見たことないし。

物珍しさに、この騒動の行末を観察していると、始業のチャイムが鳴る。

ああ、此処つて学校だったもんな、と来て数分で忘れて思い出した。

「遅刻……」

チャイムの音と同時に、黒髪先輩が呟く。

けれども矢張り声にかき消された。

声。

今度は——悲鳴。

「どけつつつてんじゃん。ノすよ！」

うわっ。

………人ゴミにまぎれて解らなかつたけど、二人の先輩方は木刀を持っている。

それで生徒を殴つて、殴り倒して——多分、その、大丈夫だったと思う——教室に向かう。

う。

全てのことが凄い速さで始まつて終わつて過ぎ去る。

ぼくは壁に背中を押しつけてその攻撃を避けた。

「……………なんだ？」

チャイムをかわきりに生徒の波がどつと引いてゆく。

「ぎょーしつもどれー」

その波の向こう側で先生が叫んでいる。

しかもこの騒動なのに冷静に。

この騒動を知って居るようだ。いつものことのように、いつものことなのか？

これ、自由な校風つて関係あるのかな？

先生は生徒の塊の中にぼくが混ざつて居ることを発見して、生徒の波が過ぎた頃にはぼくの方へ歩み寄つてきた。

「まあ、この学校に居たら厭でもあの二人のことは知ることになるさ」

さつきまで話していた先生だが、どうも既に疲れたような表情を浮かべる。折角なのでぼくは先生と教室まで行くことになった。

「あの二人つて、先輩ですよね？」

「ああ。白蛇はくだるい留衣ゆめなかつきと夢仲月。三年一組の生徒だ」

「一組つて……確か特別理系クラス……」

「そうだ。この学校で最も頭のいい生徒だと思つてもいいんじゃないかな。その証拠に黒髪の——夢仲の方は常にトップだ。トップ。トップクラスではなくトップ。あいつ以外がトップを飾つたことはないよ」

「そ……それは凄いですね」

天才つて本当にいるのか。

「先生、それ、個人情報じゃないんですか？ ばらしてもいいんですか？」
「もう周知の事実だよ。誰もが知つていることをばらすなんてないから」

「へえ。凄いですねえ」

東京だから凄いのか、この学校が凄いのか、それともあの二人が凄いのか。

「白蛇のほうもトップクラス。あんなふざけた奴らだけどここの学校には重宝する人材だ」

「あの、木刀で生徒を殴って居るのは大丈夫なんですか？」

「特に苦情が出てないのが凄いとこだ。苦情が出ないから特に注意することもない。まあ、多少注意するが指導の対象までではないってね」

「へえ……」

やっぱりこの学校、ちよつと変わつてる。

「さ、此処が有城くんの教室だ。ここを基点にこの学校を憶えればいい」

「はい、がんばります」

頑張らないと憶えられないよな、ここ。もう既に昇降口から教室に戻る気がしない。

先生は教室の扉を開けてぼくを教室内に導いてくれた。

「転校生がこのクラスに来ることになった」

ちよ、先生。ぼくが入る前にそんなこと云わないでくださいよ……。入り難い。

何か転校生って期待があるだろう？ そんなことないのか？ 都会では……。

なんとなく入り辛そうにしていると、先生がぼくを招く。

………。

恐る恐る入る。

「はい、自己紹介」

うう。

注目されるのつて厭だ。

でもみんなどうも大人っぽいな。転校生一人に注目はするが冷やかしたり必要以上に騒いだりしない。

「ええと、有城ゆうき光ひかるつて云います。埼玉から引つ越してきました。これからよろしくお願
いします」

それ以上なんか云う必要ないよな。な。ね。ね。先生。

「じゃあ有城、定石で済まんが一番後ろの空いてる席に座つて呉れ」
「はい」

注目されるのが何か厭だから、ぼくは視線をみんなから逸らしてその指定された席に着いた。

「朝の連絡。今日の放課後は中央委員会があるから、この前決まったヤツ、高遠たかとお、未月みつき、
ちやんと行けよー。三時十五分」

はーいと何処からともなく声が聞こえる。高遠と未月が誰なのか判断は出来なかつた。

「……………以上、じゃあ朝のテスト、机の上にあるもの全部仕舞つて」
……………え？ そんなの聞いてたっけ？ あれ……………マジで？

ガタガタとみんな机の上のものを仕舞い込む。

何だ？ 何の教科？

「えー、じゃあ配るぞー。あ、有城、普段は八十点以下だと再テストだが今日はお前は良いから」

「あ、はい」

今日は……つてことは明日からはぼくも再テストの対象になるのか。本当に進学校って凄いな。

テストが配られていく。

どうやら数学のテストらしい。良かった。そこそこ得意だ。文系人間にしてみればぼくは出来る方……。

大丈夫。たぶん大丈夫。

全部で三問。

よし、解ける問題だ。

テストは十分後に回収される。帰り際に返されて、その時に八十点以下だったら放課後に再テストらしい。流石進学校だ。

突然のビックリイベントにぼくは一息つく。

「ふう……」

解き終わってほぼ直ぐ。

テストが回収された。スピードも問われるんだ。凄いな、ホント。
次の教科書を調べて机の上にさっき貰った教科書を出すと、隣の子が話しかけてきて呉れた。

良かった。

「転校生。ごめん、名前よく聞こえなかったんだ。何だっけ？」

「あ、えーと有城光ゆうきひかるです」

「ですとか良いつて」

「あ、ほら、来たばかりだから緊張してるって云うか」

「の割には今のテストよく出来てたみたいじゃん」

「うーん。比較的数学は出来てた方だからなあ」

と云うより、彼の名前を聞かなかきゃ。

「ええと、君は？」

「俺？ 入鹿翔いるかしょう。よろしく」

「よろしく」

「……………」

「……………」

う、会話が続かない。

どうしよう？

話題って……。

「えと、部活を今週末までに決めろって先生に云われてるんだけどさ、入鹿くんは何部？」

「入鹿くんとかいいから」

笑う。

まあ、イルカくんって、何か変だよな。

「イルカでいい。俺もユーキって呼ぶから」

「あ、うん」

「で、俺は新聞部。大体高校とか中学の新聞部なんてマンガにあるような××先輩と××先輩が付き合ってます！ とか××先生の車に十円傷！ 犯人は誰？ とかはやんないと思うだろ」

「まあ、普通は学級新聞の学校全体版って感じだよな。体育祭があるとか何とか」

「そーそ。普通はな」

つてことは違うのか。

「この学校、自由だから？」

「ネタがあればな。まあ一年前の大事件以降、全く何もないって云っても良い。面白いこと」

「一年前？」

「ん？ ユーキ、知らないのか？」

「……うん。埼玉に居たからかな？」

「此処らへんじゃ有名だけど、まあ都外には知られてないか。……あのな、」
イルカがそう云うとほぼ同時に一時間目の開始のチャイムが鳴った。

会話を続けるよりも、授業に向かうのがやっぱり進学校だな——ってなんか毎回そんなことを思っている気がする。

「あ、やべえ。次の先生超怖いから。じゃまた後で」

「あ、うん」

そう云ってイルカは視線を黒板へと向けた。

他の生徒も皆一様に前を向く。

……相当怖い先生なんだろうな。

一時間目は英語の授業。

予習をしてきていることが前提で、予習をしていないと先生にとっても怒られる。

——そして、何故かぼくもその対象。って云うか今日教科書貫ったばかりなのですけれど！ ……と云う良い訳すら考慮して貰えなかった。その場で訳せとか……ちよつと、

ね……？

そんな授業をこなした後、休み時間になったけれど皆席を立たない。何をしているのかと云えば次の授業の予習。うわあ！ 本当にぼく、この学校でやって行けるのかな？

——そして二時間目の数学、三時間目の国語、四時間目に社会——で昼休みになった。授業が計四時間終わった……凄く疲れた。

それにしても一時間目の英語が酷かった。数学は大丈夫だったけれど。国語とも膨大な量の単語を覚えさせられるんだな……読解とかは大丈夫なだけけど古典とかで単語とか活用形を憶えるのが苦手だ。何でばく文系に来ちゃったんだろ。

「ユーキ、部活の話だけど、どこに行く予定なん？ 目星はついてるのか？」

ぐったりとしていると隣のイルカが話しかけて呉れた。普段は別の人と喋っているようにだけでも、今日はぼくを優先して呉れているみたいだ。さっきお昼を誘われて断つてたし。

「んー。そうだなあ。科学部って面白いかなあって思ってるんだ」

「科学……部。勇者だな」

「ん？ 何で？ 何か凄い実験とかしてんの？」

今朝聞いた話からすると、新聞部が結構活発に活動していると云うくらいだから何か怪しい変な実験でもしているのかも知れない。

そう思われても仕方がないと思う。

「……いや。んー。今日見学するの？」

「うん。だって今週末までには決めなきゃなんですよ。何十個も部活あるからね。今日から少しづつ見て回ろうかと」

「そうか。うん、いいと思うぜ、科学部。出来れば毎日面白い話を聞かせて呉れるとありがたいな」

「……面白いの？」

「面白いだろうよ。ま、ご武運をつてね」

「??????」

まあ良いや。

「ねえ、新聞部は面白いの？」

「んー。そうだなあ。今は特に面白いネタがないし面白いことするような人も残念ながらいないんだよな」

「そう云えば何年か前に面白いことがあつたつて話、今日の朝してたとと思うけど……」

「嗚呼。一年前ね」

「何があつたの？」

「んー……科学部に行くなら行つてから聞いた方が面白いと思うぜ。それに若しかしたら科学部でその事件、聞けるかも知れないし」

「ふうん」

「さーて、俺は部活に行くから」

「ああ、普段も部活はあるんだ？」

「そ。一応強制的に一週間に一回あるけど、運動部とかマーチングバンド部とか体育会系

の部活はほぼ毎日。俺みたいな新聞部はその月の当番になってるヤツとかが良く部室に来るけど任意」

「成程……」

学校によつて大分違うんだなあ。ぼくが前に居た学校は部活は任意参加だったから、ぼくは帰宅部だった。

そんなに活発な学校だと科学部でも何か大変なのかな……出来るだけ楽な部活に入つて勉強に専念したいんだけど。

「じゃーな」

「あ、うん」

科学部の活動時間が『毎日昼休み（任意）、金曜日5限、毎日放課後（任意）』となつていたので今日のうちに行つてみようと思う。

イルカにはこの学校内の地図を書いて貰つたから迷わないぞ。

と云う事で科学部の活動場所、第二物理室へと向かった。

「此処か……」

所要時間十五分。迷つたこともあるけど、遠い。

イルカの地図も解り難いよ——とは云えない。だつて一階と二階の間に通路が在つて第一校舎と図書館が繋がつてたりするんだもん。

と、云う事で。

「……………」

電気は付いているから活動はしているのだろう。

けれど物音が一つもしない。

何だろう。入り難いなあ。

「……………」

仕方無い。勇気を出せ、ぼく。

「失礼します」

ガラリ、と心なしか大きな音を立てて扉が開いた。いや、ぼくが開いたんだけど。

「んー？」

「あつ」

「なあにいい？」

其処に居たのは、今朝見た可愛い先輩。

確か学年トップクラスの頭脳を持つ三年生。ついでに云えば今も木刀を傍らに置いてお菓子を食べている。お菓子のお供はレモン・ティー。

「あ、あの、えーと、今日転校してきて、で、部活に入らなきゃいけなくて、で、科学部……………に入ろうかなと思いまして……………」

「ふうん……………」

先輩……ええと、白蛇先輩の前にはぼんやりとした表情の夢仲先輩。ぼんやりとしながらしゃくしゃくとポテトチップスを咀嚼している。

「えーと」

ぼくに興味がなさそうに二人はポテトチップスを口に運ぶ。

今朝のテンションの高さは一体何だったんだ？

「で？」

「はい？」

で？ はぼくのセリフだと思うんだけど。

そう思っただけ直すと、もう一度「で？」と云われた。

「ええと……活動内容とか、あとは……体験入部？ とか？」

「とか？ って云われてもねえ、ツキ？」

白蛇先輩がそう云って夢仲先輩に話を振ると、夢仲先輩はやつとポテトチップスから視線を外し、ぼくを見た。

……見詰められた。

「……………ニトログリセリンを作ります」

「はい？」

「……………超音波実験でも可」

「ええと……………」

「……？　じゃあ、空気中のアルゴンを抽出できるか否かを議論してみる……？」

「ちょ……つと……あの……」

思考回路が良く解らない。

「科学部って何、やってるんですか？」

もう単刀直入に聞くしかない。

「んー。何って云ってもねえ。何かな？」と白蛇先輩。

「……ぼてちをたべる」と云いながら視線をぼくからポテチの袋に向ける夢仲先輩。

「まあね。正しいけど」やる気なく答える白蛇先輩。

「彼……名前は？」もう一度、夢仲先輩はぼくへ視線を。

「あー。そう云えば。名前は？」白蛇先輩、もつとぼくに興味を持つてください……。

「あ、え、ぼくですか？」

全くもつて、二人を観察してしまった。心の中でツツコミを入れてて、ぼくのターンが回ってきたことに気づけなかった。

「他に誰が居んのよー」

確かに。とりあえず名乗る。そう、礼儀だ、礼儀。「ええと、有城光です」それ以上の

何者でもないぼくはそう答えるしかなかった。

「ユーキくんね。どーも」

相変わらず白蛇先輩はだるそうに云うので、ぼくは戸惑うしかない。

「ど、どうも」

「で？ 入るの？」

「え？」

いやいやいや。何の判断材料もないじゃないか。

それで入るかどうか決めると云われても。

と云うよりもこの二人には関わらない方が良さそうだ。何でぼく、こんな所で留まって居たんだろう。別の部活に行こう。そうしよう。

そう思つてどうやつて断つて去るか考えていると。

扉がガラリと開かれた。

「こんにちはデース。お世話になつてマス、新聞部の兎黒うぐろデース」

その扉の向こうにはまたまた不思議なテンションの誰かさんが立つている。

「くろろさぎ…」

さつきまでやる気のない表情で座つていた夢仲先輩が、ガタリと立ち上がり、目を輝かせて登場した人物を見つめた。可愛い。

「ハイ。相変わらず素敵デースね！ ツキさん！」

「うさうさ」

そう云つて夢仲先輩は両手で頭の上で耳を作る。

「ウサウサデース！」

新聞部の人も同じ格好をする。

「なあに？ 何の用？ 今日のはあんまり面白いことなさそうだよ。」

夢仲先輩とは打って変わって、相変わらずのゆるゆるな声のまま、白蛇先輩は突き放すように云う。

「いやあ、そんなことないですよ、だってこの科学部に新入部員が入ったって話ですからね！」

「ん？ ああ、ユーキ？」

「ユーキくんデスカー。こんにちは。宜しくネ！」

「え？ よ、宜しく……？」

何だ何だ何だ？ 一体これはどんな何の展開なんだよ？

「いやあ、ユーキくんところちの後輩のイルカくんがお友達だって聞いてやってきましたヨ！ すばらしいデスね！ 科学部の新入部員、それ即ちツキさんとルイさんに下僕が出来たことですからネ！」

「下僕……かあ」

そう云って白蛇先輩がぼくをじつと見る。

うー……。

そして夢仲先輩は——ぱり、とポテトチップスを噛み砕く。

「でももう下僕とか要らないかなあ」

「またまたあゝ。ねえ、ツキさん？ ユーキくんにうさ耳つけてこの部室に居させたいですよね？」

「うさうさかわいい…」

何でもいいのか……？ ウサギなら。つていうか男にバニーガールばりに耳を付けたって気持ち悪いだけだろうに。

「それにルイさん？ またあんなことが起きたら手足が必要になりマスよ？」

あんなこと——か。

それはさつきイルカが云つてた事件かな？

「あんなことはもう起きないつてー」

「解りませんよ？ お二人はこの辺じゃ少し有名デスからね」

「むー。だつてアレもなあ……一応未解決事件でしょ？ 私とツキに疑いがかかったけど結局犯人が誰だか解んないつてさー」

「そう！ あの事件！ あの事件は面白かつたデスね。また事件起こして下さいヨ。新聞部の新聞が賑やかになりマスから」

「だからーアレは私たちの所為じゃないつてばー。濡れ衣も良いところ。ね、ツキ？」

「ひどいね…」

「ねー」

……ぼくをそつちのけで話が進んでるよ……。一体何なんだ？ その事件つて云うの

は？ そんなぼくの表情を読み取って呉れたのか、兎黒先輩がぼくへと視線を向けた。

「ア、初めましてユーキくん。ワタシは新聞部部长を務めている兎黒慎二うぐろしんじって云いマス。お気軽にウグロ先輩って呼んでくだサイね！」

なるほど、だから「くろうさぎ」って呼ばれていたのか。

「そうそう。ユーキくんは転校生が故にこの事件知らないそうデスね〜」

「そうなの？ あー、だから科学部とか来ちゃったんだ。まあいいけど」

「それも…何かの縁…」

「え？ えーと？」

ぼくが戸惑っていると、あれよあれよと話が進む。

兎黒先輩、台風みたい……！！

「昨年あった『星神高校木刀傷害事件』。その犯人の疑いを掛けられたのがこのお美しいお二人なのデス！」

「星神高校木刀傷害事件？ 何ですか！ その物騒な事件！」

思わず大きな声でツツコむ。

え？ 何々？ 何それ？ 聞いたことないですけど？ と云うか……え？ この二人

の先輩が疑われたの？

「お二人は——当時ルイさんの方が生徒会長でツキさんの方が副会長だったのデス。然しお二人とも当時から成績は良かったのデスが素行が宜しくなくてデスね。それで疑われた

のデスよ」

その頃から素行が悪かったのか。今朝の出来事を思い出す。

「酷い話だよねー。そんな訳で異例に早い時期に引退させられちゃったのよ。本当は二年生の三学期に交代するのが普通なんだけど、二学期の中頃で交代。これでも粘ったんだからー」

「今は…弟が生徒会長」

「弟さんが？」

「そう…太陽くん。私が…月で、弟が…太陽…なのです」

夢仲先輩は自慢するようにそう云う。夢仲先輩がお姉さんかあ……。

苦労しそう。

とは云え。

「さすが、ですね」

生徒会に所属できるのは、学業に支障がないと云うことが条件らしいと聞いた。生徒会活動してもその成績を落とささないだけの自信と実力があると云うことだ。

本当に、この先輩たち半端ない……。

「その上ですね、ツキさんも可愛らしいですが、弟くんの方も恰好良いのデスよ。まあ生徒集会とかで何れ見ることになるでしょうけれど」

へえ……つてそれはまあ良いけどさ、結局その事件は何だったの？——と聞きたい。